

## 第5章 札幌トモエ幼稚園における 基礎的人権教育の実践

### 第5節 素直な自己表現によって個を確立する人間関係学的実践

現代は、皆と同じでなければ不安になる人間が急激に増加している。他の人と少しでも違おうと、いじめの対象になることもある。本来なら多様であるはずの個々人の価値観が、異常に均質化していることの現れである。自分の個性を認められないために、他者の個性もまた認められないのである。

この現象の背後にある大きな要因は、幼少期の生活環境である。我が国の教育システムは、本質的には百年以上前の明治時代からほとんど変化していない。教師指導型の一斉授業が基本である。これは小学校以降だけではなく、幼児教育の場にも当てはまる。

そこでは、子どもは教師の指示通りに動くことを要求される。指導の通りに動く子どもが良い子どもと評価される。子どもたちは教師に叱られないように、褒められるようにと、教師の顔色ばかりうかがうようになる。自ら主体的に行動することはほとんどできない。ひたすら大人の指示を待ち、指示された課題をこなすのみである。自ら考え行動することを恐れる「指示待ち症候群」の人間が増え続けている所以である。

大人の側も、ありのままの自分ではできない。心に鎧を着るように、自らの良心を偽り、心に仮面をかぶって、良い教師・良い親を演じてしまうのである。互いに仮面をかぶった建前だけの表面的な関わりの中では、親しい人間関係を形成する喜びを体験することはできないであろう。

教室では、教材教具は皆同じものを持たせられる。制服はもちろん皆同じもの。給食でも皆同じものを食べる。絵画も習字も皆同じ。皆と少しでも違っていると、子どもたちが不安になるのは当然であろう。個々の違いを認めず、皆同じであることを強要する教育が、子どもの主体性や自発性を失わせているのである。皆と同じでなければ不安になる心の病から発する問題は「お道具箱症候群」と名付けられよう。

人間は顔が皆違っているように、心も皆違っているのである。ひとりひとりがそれぞれの個性を持った、かけがえのない人間なのである。しかし、互いの違いを表現し認め合うことのできない社会の中では、心の病はますます増加していく他ないであろう。

トモエでは、自発活動の時間を中心に、自ら主体的に活動に取り組む。教材はすべて共有であり、制服も給食もない。教室には壁がないオープンスペースであり、園舎全体が共有スペースである。子どもも親もスタッフも、参加する人は皆、好きな人と関わり合うことができるため、互いの人間関係もまた共有財産なのである。

大人も子どもも、多くの人と親しく深く関わり合うことで、心地よい生活環境を創造している。特に、子どもの素直さと優しさから、大人たちは学んでいるのである。素直さや優しさは心地よいものであり、使えば使うほど増えていくものである。人はさらにその心地よさを体験したくなり、子どもたちによって素直さや優しさを使わせてもらうのである。個々人が自分の人生を心地よいリズムで歩み、安定した楽しい日々を創造することができるように援助指導している。

#### 事例(32) 幼児は自由の中で考え続ける

子どもたちは、自由な活動の中で、様々な自己表現をする。素直に自己を表現することで、自己を

認識し、自己制御を身につけていく。子どもはそれぞれの発達段階に応じて、実に多くのことを感じ考えているのである。

次のレポートは卒園生によるものである。高校在学時に、幼児期を振り返って綴った記録の一部である。

俺は北海道の札幌で生まれた。

泣き虫で内向的で木登りよりも空想ばかりにふけていた。

オリジナルのお城とか惑星を考えたり、自分で考えた冒険モノのストーリーを絵に描いたりするのが好きだったし、幼なじみの女の子とおままごとよくやった。

そのせいで漠然と“結婚生活”なるものに憧れのようなものを抱くようになる。

“おおきくなったらすきなひととじゃんぐるをたんけんする”それが夢だった。

“そしてぼくがまもるんだ”4歳位だったかねえ。

そんな空想好きの俺は人の話を聞くのが苦手だった。

丁度その頃エレクトーンを習っていたのだが、些細なことでやめてしまう。

“自分で練習していった指の位置を先生に注意された。”そんなだけで。

その時俺は顔を真っ赤にして怒った。この事は今でも覚えている。ホントだぜ。

“自分のやり方を直された。”悔しさのあまり黙り込んでしまった。

...いや、でもこの先生は全然悪くないんだよ。優しい先生なんだ。

このあたりからかなあ、変なプライドが出来ちゃって、他人と同じ事をするのが大嫌いになっちゃった。益々自分の世界に入り込むようになる。いけねえなあ...

まあこんな俺だから普通の幼稚園に通うなんて無理な話さ。

じゃあどうしていたか？幼稚園には行かなかったのか？

いや、行った。この幼稚園に行かなければ今の俺は無かった。

初めて見学に行った日。

山中のスキー場の側にその幼稚園はあった。三角屋根の赤い建物だった。

ボクはいつにも増して憂鬱な気分だった。“よーちゃん”なんていきたくないよ...

「皆一緒に何かをする所なんだろう。」これまでに2軒ほど見てきたけど、どうやら“きょーひつ”と言う部屋の中でいつも同じメンバーで皆同じ事をさせられる、つまらなそうな所だった。しかも何故かそういう所の“せせー”と言う大人の人達は、いやに声を高くし、軽い調子でこちらに応じるので、本当にボクの話の聴いてくれているのだろうか？と疑問に思ってしまった。何だか馬鹿にされているようで好きになれない。

だから2軒とも断ったんだ。

今回もきっとそうだ。ボクは“よーちゃん”なんか行かない。家で絵を描いていた。

それにボクは山なんて嫌いだ。服が汚れるし怪我をする。気持ち悪い虫がいる。

こんな所絶対嫌だ。

車から降りると“よーちゃん”の外に出て遊んでいる園児達が目に付いた。

あれ？なんで皆外に出て遊んでるの？“よーちゃん”は出ちゃいけないんだぞ？

入り口のドアも開けっ放しだ。ちょいと覗いてみた。

「うおー！」「ぎゃーうぎゃー！」すごい声を出しながら暴れまわる子供達。

ほとんど動物園の野放し状態。

な、なんだ？ここは？ああ、きっと今は“あそびじかん”なんだな？  
第一、服が“せうふく”じゃない。動きやすい服に着替えたんだ。きっとそーだ。  
でもその野生的な雰囲気気圧されてボクはすっかりビビってる。こ、こわい...。  
ちょうどその時ボクの側に来たこの園児らしい女の子と目が合った。  
精一杯強気に行こうと思った。口から出た言葉は「ばーか。」だった...。  
するとその子は表情一つ変えず、「ばかって言ったら自分がばかつ。」と即答。  
あっけにとられているボクを背にまたダダダッと走って行く。  
その後の事は何も覚えてない。ただ帰りの車の中で、あの言葉の意味をひたすら考えた。  
結局その言葉の意味は良く分からなかったから、自分なりに「ばかって言うのはやめよう。」と決めて納得した。新鮮な感動だった。  
うまく言えない。でも何故かその時、今までちやほやされてきた自分がすごく大きくなれた気がした。  
その後、何かの縁あって、ボクはその“よーちゃん”に入園した。  
当時のボクは人見知り激しくて、付き合いが下手だった。(今もだが。)  
両親にとってボクは初めての子供であり、ほぼ一人っ子状態で育てられた。  
危ない事は避け、行儀良く、静かで物分かりの良い“良い子”として教育を受けた。  
至れり尽くせりの生活の中でボクはだんだん人の事を考えられない子供になっていく。  
さらにほとんど親の間だけで育ったボクは人見知りする子供になっていった。  
悪気が無くても人を傷付ける事を平気で言ってしまう。  
人付き合いに慣れないボクは知らぬ間に自分で孤独を選ぶ。  
人を傷付けてしまうなら孤独のほうが良い。傷つける事が恐かった。  
この頃の心の移り変わりをボクは不思議な程良く覚えている。  
それだけ沢山、印象深く新鮮な思い出があると言う事だろう。  
もちろんその頃に“孤独”とかそんな言葉を知っているはずが無い。  
でもあの時の感情を言葉で表すならこれが一番ぴったりくる。  
人を傷付けてしまっているのが自分でも分かっていた。そんなつもりじゃないのに...。  
その“よーちゃん”は壁で仕切る“きょーひつ”が無い。“くらす”も無い。  
更に驚いた事にじかんわりがなく、朝から帰るまでずっと“自由”だった。  
“たいくこーなー”、“ばずるこーなー”や“ぶろっくこーなー”。  
もっともっとたくさんのこーなーがあって、好きな所で好きな事をする。  
一応“せせー”達はいたけど、皆から色んなあだ名で呼ばれ、一緒に遊ぶ仲間みたいな人達だった。  
子供同士のいざこざには一切関与しない。  
けんかが起こっても「こら！やめなさい！」と納得のいかないままやめさせるのではなく、終わるまでじっと見守っていた。  
もし殴り合いになっても、「ダメ！」と言って怒るのではなく、相手の目線に併せて立ち、叩いた理由をまず聞く。そして「叩かれたら痛いんだぞお？俺だってゆうたに叩かれたら泣いちゃうな。ゆうた、もし叩かれたらどう思う？」「...ぐやしい...。」「他には？」「...痛い...。」「うん。」「あと...かなしい...。」「嫌な事ばかりだな。」「うん...。」「じゃ、どうしたら良いと思う？」「...たたかない...。」「そーかー。そうおもったか。へえーえ。ゆうたは優しいな。男らしいぞ。」で、今度は叩かれた方に行く。その子は泣いている。「どこ痛い？」「こっ、ひっく、...ここ...。」「ああ、ホントだ！痛そうだなあ。俺も痛くなってきた！痛いなー。」「...痛いのか？だいじょうぶ？」「...は？大丈夫か？」「...

うん、もう痛くない...、××（その先生のあだな）は？」「あれ？ が治ったらこっちも治った！」てな具合。漠然と禁じられるのではなく、心で納得出来た。

相手を気遣う事を学んだ。子供が描いた絵や、粘土の作品を沢山誉めた。

子供達に自信が付いて行く。

毎日が“自由” 漬けだった。園舎の出入りは自由で、好きな時に山へ出て遊んだり、沢へ水汲みに行ったり、木にロープを吊るした“ブランコ”で遊んだりと、山の自然を好きなだけ体験できた。このよーちゃんを語り出したら本当にきりが無い。

冬のホワイトクリスマスなど、素晴らしい経験ばかりだった。

とてもボクの文章力じゃ書ききれない。入って良かったと素直に思う。

マイケルジャクソンの歌で踊るよーちゃんなんて滅多に無いだろうな。

沢山の事をあの幼稚園で学んだ。

自然の中のルール、子供同士、大人同士の約束、それに基づいた上での“自由”。

これを自分なりに理解できた事。俺の財産だ。

十年以上昔にこんな考えがあったことに、今ごろ俺は驚いている。

当時「ばんけい幼稚園」と言う名だったが、今は改め「トモエ幼稚園」。

ビニールハウスの園舎が話題を呼んだ。今も北海道でがんばっている。

事例（33） 自由って何をしてもいいってことじゃないんだよ

トモエの活動は自由が基盤となっている。自由は、放任とはまったく違うものである。自由とは、好き勝手に何をしてもよいということではない。自分の判断と責任において行動することが求められる。それは、子どもたちが自然な形で感じ、確実に身につけている。

こんな例があった。

トモエで3年間を体験したある男の子が、小学校1年生の時に、別の幼稚園を卒園した兄を連れて来たことがある。自由を体験していないその子は、トモエで見ることにすることがすべて驚きであったようだ。彼に向かって、こう言ったという。

「この幼稚園はいいなあ。先生たちは怒らないし、自由に何をしてもいいんだもの」

すると、卒園生である彼は、こんな言葉で答えたという。

「自由って、何をしてもいいってことじゃないんだよ。何をしてもいいの、いけないの、自分で考えなくちゃいけないんだ」

もちろん、このような言葉を子どもたちに教えたことはない。彼は自分の体験の中から培ったものを、自分の言葉として表現したまでである。

これは、幼児期に主体的自発的に生活した体験だからこそ、自然な形で身につくのである。日本にも、小中高校で自由な教育を試みている例があるが、学童期以降に自由を与えられても、子どもたちは混乱するばかりで、自由を使いこなせないでいる。乳幼児期の生活環境がいかに重要であるかがわかる例である。

事例（34） 子どもってすごい！！

トモエは、大人が子どもたちの優しさや素直さから学んで、自己を見つめ直し、変化成長していく

場である。次のレポートは、実習生が3週間トモエで体験し、感じたことを記したものである。

“子どもってすごい！！”と実習を終えて感じています。トモエで3週間過ごして自分が抱いていた保育観、教育観がいかに高慢だったかを思い知らされました。

「教育とは教師（大人）が子どもの可能性を引き出してあげること」...一見、子どもの立場に立った考え方のように、私もそれが理想的と思っていたのですが、それはとんでもないことでした。毎日子どもと関わっていく中で、子どもの鋭い感性を前にして、どんどん自分のバケの皮がはがされて、私も一人の人間なのだ、というレベルまで立ち返されてしまいました。そんな中ではとても、子どもの可能性を引き出してあげる、なんて言うおこがましいことは出来ません。むしろ、子どもたちの方から教えられることばかりでした。子どもたちの、人を思う心の広さ、やさしさ、人間関係を作る力...大人になるにつれて、なんてたくさんの良いものを落としてきてしまったのだろうと思います。まったく子どもの前では謙虚でなければいけないな、とつくづく感じさせられました。

こんな風に考えられたのも、トモエが人があるがまま認めてくれる場所だったからだと思います。普通なら、実習生として子どもに何かしてあげなければ...などと教師風をふかせて子どもの前に立ってしまいがちなのに、ここではありのままの姿でいることを許され、弱いところも出来ないところも個として受け入れてくれました。だから私も、相手を丸ごと受け入れられる心を持てます。それが心地よい関係となって、自然と相手から学ぼうという謙虚な気持ちにさせてくれたのだと思います。人間関係の基本をもう一度学びなおせたことは、私にとって大きな大きなプラスです。相手としっかり向かい合えるゆとりも与えられ、子どもがますます好きになりました。本当に、この実習は自分を成長させられる実習だったと思っています。また、子どもと一緒に親子の姿を見られたこともプラスでした。子どもにとって親とは、特に母親とはなんて大きな存在なのだろうと感じています。幼児教育は人格教育だ、などと月並みな知識で考えていたことも、親子関係、家族関係を作り上げること抜きに考えてはまるでだめなのだという事に気づかされました。本当に幼児教育の果たす役割は大きいと感じています。そしてそれに気づかせてくれたトモエはすごい幼稚園だ！！と思います。

#### 事例（35） 直感的に相手を理解し配慮することができる子どもたち

親や教師から管理されて育つと、子どもは自己の本音を抑圧せざるをえない。怒られないように、褒められるようにと、大人たちの顔色ばかり伺う生活になってしまう。大人の前では良い子を演じていても、大人の目の届かないところでは、抑圧していた感情を爆発させることになる。

5歳の男児の例を紹介する。この男児は、2年間ある幼稚園に通っていた。その園は厳しいしつけによって子どもたちを管理していた。子どもたちは日常生活のほとんどを、教師からの指示によって動かされていたという。

ある事情によって、彼はトモエに転園してきた。しかし、指示されて動くのではなく、自ら主体的に考えて活動するトモエの日常に、彼はたいへん戸惑った。小さい子が使っている玩具を無言で取り上げたり、近くにいる子を訳もなく叩いたり。まるで手綱の切れた馬のような状態になったのである。彼は抑圧していたエネルギーを放出するのみで、その場の状況を判断できず、自分がどのように行動すべきかがわからないのである。

一方、小さい時からトモエで育った子どもたちは、様々な体験を通して本能的な直感を身につけている。年長組くらいになると、状況を的確に判断し、相手に配慮することができるようになっている。

この男児の無茶な行動に対しても、配慮して関わり、言葉をかけ続けていた。

ある時、数人のグループがドミノを積み上げて、一生懸命大きなお城を作っていた。これを見るなり、転園して間もない彼は興奮して、このお城に体当たりしてしまったのである。一瞬にしてガラガラと崩れるドミノのお城。しかし、グループのメンバーは皆、彼を責めることはしなかった。お城を壊された子どもたちが、彼の細かな事情を知っていたわけではない。しかし、彼の様子から直感的に相手を理解し、彼のありのままを認め、彼に対して配慮していたのである。親たちやスタッフもまた、彼を見守り続けた。

こうして周囲の人々に受け入れられ、自己を表出し続けたことによって、この男児は次第に自分の言動を見つめ、コントロールすることができるようになっていったのである。

もっとも彼の場合は、年齢がそれほど高くなっていない段階でトモエに来て、自己修正をすることができた。しかし、小さいころから小中学校までずっと、ひたすら指示を待つばかりで自ら考え判断する機会がないまま育ってしまった場合には、その発達の歪みを修正することは非常に困難であろう。心の病を発症してしまう例も多数である。

#### 事例（36） 親子で楽しむ家族レクリエーション大会

トモエでは、発表会や運動会といった、親に見せるための行事はしない。それらの行事では、ほんのわずかな出番のために、何週間も前から何度も同じ練習を繰り返さなければならない。小さな子どもたち自らが心から楽しんで意欲的に取り組むことは、ほとんど望めないであろう。ただ与えられた役割を義務的にこなすのみである。

トモエのレクリエーション大会は、事前の練習は一切せず、直前にゲーム内容を説明するだけである。ほとんどのゲームを、親子が一緒に楽しめる内容にしている。

次の2児の母のレポートは、レクリエーション大会に初めて参加した親子の体験記である。この創造的な一日の空気を、少し感じることができるであろう。

私：『家族レクリエーションって、どんなことをするのですか？』

チエコさん：『仮装をしたり、親子で参加して楽しむんですよ。運動会みたいなものかな...。』

昌吾：(無言。表情がこわばる。)

この時、私は運動会であるのに、親子で参加して楽しむということが理解できませんでした。それは私たち家族がトモエに入るきっかけとなったのが、前の幼稚園（いわゆる普通の幼稚園ですが）の運動会だったのですから...。園長にはいつも「他の幼稚園とは比較しないですよ。失礼なんだから、もう。」と言われていました。ですが、チョットだけ書かせてください。

前の幼稚園の運動会の練習は、ゴールデンウイーク明けから約2ヶ月間行われます。お遊戯、鼓隊、カラーガード、組体操など、様々な種目の練習をします。自由遊びの時間を削り、厳しい先生達のまなざしの中、子ども達は訓練されます。ラスト1週間は、お昼寝の時間さえもカットしていたようです。私はお手伝いで総練習の日と運動会当日、子ども達の表情を間近で見てしまったのですが、競技によっては無表情であったり、「やればいいんだろう」と投げやりな感じだったり（もちろん、楽しそうにしている子もいましたが...）異様な感じがしました。運動会当日、親達はというと、カメララインというところにズラリと並び、我が子をカメラに収めることだけに集中しているようで、また、競技中も競技後も拍手や声援、応援というものはなく、盛り上げようという雰囲気がないことに、淋

しさを感じていました。そんな運動会は昌吾にとってイヤな思い出になってしまったようです。運動会が終わった後、「運動会どうだった？」と聞くと、「イヤだった」と言いました。全てがイヤだったそうです。

このような体験をして、トモエの家族レクリエーションに参加することになったのですが、私は何の抵抗もなく、きっとトモエなら楽しいに違いないと思いました。でも、昌吾は違いました。運動会のイメージが残っていて「昌吾は出ない。見てる。」と言いつつ、当日を迎えました。

会場に着き、家族レクリエーションが始まりました。皆が踊り、競技が進んでいっても、昌吾と裕介は私たちから離れようとしません。そのうちに私と主人が競技に参加したくてウズウズとしてくるではありませんか!! なんとか、昌吾と裕介に頼んで、主人は綱引きの列の中に入っていました。私も主人と交代して綱引きに出てしまいました。見ているだけでもとても楽しいのですが、自然に競技に参加したくなってしまうこの雰囲気は一体どこから来るのだろう。勝つとか負けるとか関係なく、子どもも大人も全身で楽しんでいて、家族で作戦を立てながら協力している姿は見ていて微笑ましく、うらやましく思えました。誰もがキラキラと輝いていて、とてもまぶしくて、本当に来て良かった、楽しいなあー、と思うと同時にショックもありました。それは1年4ヶ月もの間、前の幼稚園で何をやってきたのだろう、やらせてしまったのだろうと思うと、昌吾に申し訳なく思いました。こんな思いをぐるぐるしていた時に、ちょうど景子さんが近くにいて、思わず、こんな気持ちをしゃべっているうちに、ウルウルと涙がでてきました（景子さん、失礼しました）。

そして、昌吾はついに競技に参加したのです。障害物そり引き競争に。私たちも少しは昌吾に参加を勧めたのですが、やってみようと思ってくれたことに、「やったー」という気持ちでした。いざスタートするとものすごくいい表情で、私もとてもうれしくなりました。と思ったら、障害物のところでひっくりかえって大泣きに変です。それもまた、思いっきりでよしという思いでした。

午後、仮装パレードが始まり、これまた一人一人が楽しんでいる様子が伝わってきました。私達は今回は何も仮装しませんでした。来年は何かに変身できれば...と思っています。昌吾も「何か仮装したかったなあー」と言っていました。事前には、仮装も拒否していたのに、実際見たら楽しかったようで、自分もやりたいと思えるほど心が変化したようです。すごいことだと思いました。

帰りの車の中で、昌吾に聞きました。「昌吾、今日、楽しかった？」と。すると即答で「楽しかった。」と返ってきました。その後、次々とその日の出来事を話してくれました。この家族レクリエーションは私達家族にとっても、夫婦にとっても、私自身にとっても、意味深く、考えさせられた感動の1日でした。練習一つなく楽しく盛り上げてくださったスタッフの皆様に感謝します。キラキラ輝いていた家族の皆さんも本当に素敵でした。

始まったばかりのトモエ生活、一日一日を大切に、家族の時間を大切にしながら、もっと楽しんでいきたいと思えます。

### 事例（37） 子どもたちのように「あるがままの自分」でありたい

乳幼児は、大人たちの邪魔さえなければ、ありのままの自分であることができる。彼等自身が持っている豊かな感性を発揮し、創造的な日々を楽しむことができる。しかしながら、大人はそうではない。自分にレッテルを貼って、心を着飾り仮面をかぶり、よい親・よい教師を演じてしまいがちである。あるがままの自分であることの喜びを、大人は子どもから学ばなければならない。

スタッフの手記から、この点について考察する。

ある時、5歳の女の子と遊んでいました。私がふざけたのがおもしろくなかったのか、彼女は急に怒り出し、持っていた木のおもちゃで私を叩きました。私は怒って「物で叩くなんて、ひどいじゃないか!」と言いました。すると彼女は「そっちがふざけるからでしょう!」と言います。「ふざけたのは悪かったけど、だからって叩かなくてもいいでしょう。それにそんなに固い物で!」と私。彼女は私をにらみつけました。私も負けずににらみ返していたら、とうとう彼女はワーンと泣き出し、「マサトなんてキライ!」と言い残して、その日来ていたお母さんの胸に飛び込んでいきました。

このようなことはよくあることです。見方によっては、私の言動は大人気ないかもしれませんが。しかし私と彼女はかなり率直な関係だったので、あくまでも事実に対しての自分の考えとその時の感情を、ある程度本気で表現しました。7~8分後、彼女はお母さんに慰められ、そして注意もされたのか、私のところに来て「さっきはごめんね」と小声で言いました。

彼女もそうですが、トモエでは子ども達はいつも本音で関わってきます。それは、彼らの「ありのままの自分=本当の自分」の表現です。それが可能なのも、彼らがこの環境で「自分が受け入れられている」と感じているからだと思います。実は、この夏休みのスタッフの勉強会は、そうしたことの重要性についての内容でした。

ひとつは、今、学校に広まっている学級崩壊という現象についてです。NHKスペシャルで放映されたビデオを視ましたが、そこには従来の学校システムを根本から揺るがす子ども達の荒れた姿が映し出されていました。もうひとつは、NHK人間大学のテキスト「家族の闇をさぐる」(講師:精神科医・斉藤学)を読んだのものでした。社会に多発する青少年の凶悪な犯罪や心の病と現代人が作りあげてきた家族、そこにある親子関係との関係について解説したものです。これら二つの話題が投げかけるテーマは、子どもが「ありのままの自分」を表現できる環境の重要性です。

学校で荒れる子どもは、学校という硬直したシステムの中で「自分を受け入れてほしい、認めてほしい、関わってほしい」という叫びをあげている姿のようでもあり、またそれ以上に、それまで育ちの過程での親子関係で欠落していたものを必死で取り戻そうとしている姿であるようにも感じました。それはまさしく、「ありのままの自分」の表現を受け入れてほしい、あるいは受け入れてほしかったという叫びのようでした。

そして斉藤氏のテキストには、現代の親子関係には、子ども達のいじめ・いじめられ、他者への暴力や犯罪、また過食や拒食、あるいは将来の人格障害に至らしめる要因が隠れていることが示されています。そこには非常にシビアなかたちで、子どもが「ありのままの自分」の表現を阻む親の関わりと、家族の機能の仕方が分析されています。

これら二つの話題は、まさしく現代に生きる私たちに直接関係することだと思います。自分には関係ないと感じる人もいるかもしれませんが、周りにはそうしたことで苦しんだり闘ったりしている子どもや親がいるかもしれませんし、誰だってその渦中に入り込んでいく可能性があるように思います。斉藤氏のテキストを見ても、私と私の家族のあり方に当てはまる場所もあります。現代社会に生きるということは、自分自身に対する注意力を高めなければならないということを感じます。

しかし、そのことは簡単ではありません。社会は私たちに、いちいちそんなこと(自分に注意力を向ける=自分を見つめる)を気にせずに、簡単で楽な生き方をするように迫ってくるようであるし、何よりも自分を見つめたところで、過去に何かの原因があるとしたら、それを取り戻すことができないと感じたり、実際にできてそれがとても難しいことだとわかっているからかもしれません。現代社



会は、そうしたことに気づいたり、また気づいてもそれを何とかしようとするのを邪魔する働きを持っているのかもしれませんが。

しかし、ひとたびトモエに目を転じると、私たちが前向きになれる雰囲気があるのではないのでしょうか。すごくいきいきと輝いている人がいる。そうした人を見て、落ち込んでいる時はよけいにたつくなる時もあるかもしれない。でも、それは自分もそのようになりたいと望んでいることの裏返し。の気持ちだということに気づいたりもする。また、つらい時には誰かが慰めてくれたり、悩みを打ち明ければ真剣に聞いてくれる人がいる。そして、忘れたい、考えたくない時は、パーッと羽目をはずしてバカになることだってできる。じっくり立ち止まったり、休息したりもできる。それはあまり肩ひじ張らずに生活できる環境、「ありのままの自分」を表現していい環境だと言えます。そうした環境が、私たちが自分を見つめ、そこから前向きに生きようとするこゝになくてはないように思います。そして実はそのことが、子どもたちが先程の彼女のように「ありのままの自分」を表現する環境を私たちが創っていくこと、あるいはそうした表現を受け入れることができる大人になることと関係するのだと思います。

実は私自身、先の彼女に謝られる前に、自分の態度がキツ過ぎたかなあという思いもあったので、機会をつくって私の方からそのことだけでも謝ろうと思っていました。しかしどこかに、大人の自分が先に謝るのもしゃくだなあという思いもありました。先に彼女に謝られて、私は自分の心の狭さのようなものを感じました。彼女が私を許し素直に謝ったのに対し、私は大人のメンツにこだわっていたのです。それが私の「ありのままの自分」です。でも、それだけでは私としては納得できない。本当は謝ろうと思っていた私も「ありのままの自分」だからです。しかし、彼女にそれは伝わっていません。なのに彼女は、私を受け入れ、許し、謝ったのです。メンツにこだわっていた私よりは、やはり彼女の方が心が広い。ありがたいことです。

しかし、いつまでも、何回もこんなことを繰り返していると、彼女のような人はどう反応するか、私は何回か同じような体験をしています。それは、ニヤッと笑って「マサトは、この間も謝らなかったもんネ」などと言うのです。それでもごまかしていると、今度は怒って「マサトはいつも謝らない」と指摘するようになります。かといって、私を受け入れていないわけでもない、むしろ受け入れているようなすっきりした態度に出てきます。それは多分、謝らないマサトを受け入れるということは、そういうマサトに怒りを感じる自分を（自分で）素直に受け入れるということと関係しているのでしょう。他人の「あるがまま」を受け入れるということは、どうやら自分の「あるがまま」を受け入れるということのようです。子どもの「あるがまま」を受け入れられる大人になるには、まず自分の「あるがまま」を受け入れられるようにならないといけないということ、私にも大きな課題です。子どもたちのように、私も素直な人間になりたい。

#### 事例（38） インターナショナルの本当の意味は？

ありのままの自分を認めることは、他者のありのままを認めることでもある。素直に自己を表現することは、他者の表現をそのまま受け入れることでもある。多くの人と親しく関わり合うトモエは、自己を確立し、他者の個性を認め合うことのできる環境である。

ある母親のよる次のレポートには、それが的確に表現されているのが読み取れよう。

近頃、いたるところでインターナショナルとか国際的などという言葉がきかれ、そのコトバは、ス

キー場やらホテル、学校や塾、はては幼稚園にまで、使われています。また地球がせまくなり、海外との交流がさかんに行なわれるようになった現在、国際人であることが求められるようになってきました。

いったい、このインターナショナルであること、国際人であることってどういうことなのでしょう。よく一般に英語や外国語が話せるとか、海外に行ったことがあるなどということが、インターナショナルの条件のようにも思われがちですが、本当にそうでしょうか？

私自身、海外生活を何年も経験し、仕事柄、英語も話しますが、決してそのようなことが、インターナショナルであることの第1条件ではない、と常々思ってきました。そしてトモエの環境の中で2年を過ごし、様々な経験をする中で、また最近、オーストラリア人や、黒人の女性をトモエに連れてきて、子ども達との交流をみる中で、その答が見えてきたように思います。

まず最初に、この春、友人のスコットがトモエに行ってみたいというので連れてきました。スノーボードに夢中の彼は、小さな幼児がスノーボードをやっているという話を聞いて驚き、トモエに興味をもったようでした。その時のスコットに対する子ども達の反応は様々で...。他のスタッフに対するのと変わらず、まつわりついてきて、昼食時にも肩車しようとして“あとで”と言われるY君。直接かかわらないけれど、すぐそばにいて、スコットの背中のところにはイスをつんだりしているK君。お弁当の時スコットが向かいにすわったら、じっと顔を見てから「ネエ！ロードってえいごで何いの？」と聞いているH君。ロードって英語じゃないか？。また、英語で名前・年などしっかりお話しているD君やRちゃん。S君3人組は、ちょっと離れたところから、スコットを見ながら、一生懸命“マイ ネイム イズ ~”と言っているが彼には届かない。Iちゃん3人組は、そばに寄ってきて、話しかけられると、てれ笑いして逃げ、またあとで寄ってくる。Nちゃんはとっても関心をもち、少し距離をおいてずーっとそばで見えており、話しかけようとスコットが寄っていくとにげる。...などなど、いろいろな子どもたちの反応、かかわり方がありましたが、どの子の心もスコットに対して開いているのがわかりました。

次に、まだ記憶も新しいと思いますが、10日間程、家にホームステイして、市内の幼稚園、小中学校を視察していたアメリカ人の先生、スージーをトモエにも連れてきました。スージーは、一目トモエを観て、まわりの美しい自然環境に感激し、壁のない、ワクのない園舎の中で、生き活きと過ごす明るい子ども達の顔を見、とてもトモエのことを気に入ったようでした。このような環境で過ごすことは、この年令の子ども達にとって大変大切であり、アメリカにもこのような幼稚園が多くあったら、犯罪がもっと減るのではないかとまで言っていました。自由の国アメリカと言われながら、幼稚園はプレ・スクールといわれ、子ども達は、学校への準備として、きちんとしっかりつけられるところが多いとのことでした。

スージーが来た時は、ちょうどけんじ君のお別れ会で、盛り上がっている最中。園長に「アメリカの歌でも歌ってよ」と言われ、“スタンド・バイ・ミー”をうたってくれたのを、皆さんおぼえていると思います。この時はすぐ降園の時間になり、子ども達と交流する時間はあまりありませんでしたが、それでも何人もの子ども達が、スージーと英語で、日本語で、ジェスチャーで話し、握手をし、その顔は皆、異質なものが来たというのではなく、やはり暖かく心が開いているのを感じました。そして各々に自分の表現の仕方でも“スージー”とかかわりをもっていました。

例が長くなりましたが、トモエの子ども達は、訪れる人が、今回のように外国人であろうと、実習のお兄さん、お姉さんであろうと、あるいは ちゃんのおじいちゃんであろうと、赤ちゃんを連れてきた見学のお母さんであろうと、例えどんな人に対しても、かかわり方は各々であれ、みんな心を開い

ていて、その訪問、存在を受け入れているように思います。他の幼児教育の場や学校などでは、プランを組み、前もって準備、練習しないところはいかないでしょう。

私は、インターナショナルであること、国際人であることとは、このトモエの環境、そして子ども達のように、まず第1に異質なものを、自分と異なる人やもの、考え、そして異文化を受け入れられること、だと思ふのです。違った肌の色や目の色、異なったコトバを話す人などの外国人に限らず、自分と異なったものに、まず心を開き、受容する。そして、第2に、受け入れられるだけでなく、相手に対して自分を表現できること。自分はいかに、あなたはどうか？というコミュニケーション能力を身につけ、自己のアイデンティティがあること。この2つがない限り、例えどんなに英語が話せても、海外を歩き来していても、異文化を受容せず、また表現すべき自分がないのですからどうにもなりません。コトバは、あくまで自分を表現する道具として必要なのですから。

このように異質なものを受容できる感性と、相手に伝えられる、表現できる自己をもった上で、コトバやその他様々な技術を身につけていくと、21世紀において、この日本で、地球上で、真の国際人として、生きていけるのではないかと思ふのです。

そしてこの2つの大切なものは、幼児期に、親に愛され、トモエのような環境の中で、親以外の多くの大人達からも愛され受容され、ワクや規制の少ない生活の中で、常に自分で考え、自分で判断しながら、遊びをみつけ、人とかがわり過ごしていくことにより、身につくものではないでしょうか。

2年と数ヶ月前、こんなことを考えてトモエに入園したわけではなく、体験日のある晴れた日に初めてここを訪れて、まわりの美しい自然に魅せられ、何だかおもしろそうな園舎の中が気に入り、なんにも考えず、思わず直感で入ってしまった親子ですが、今、本当にこのトモエと、出会えて良かったなあ、と思っています。

#### 事例（39） 幼児期から個性を育て続けている卒園生の手記

20代になっている卒園生からのメールを紹介する。個を確立し、自分の考えを率直に表現している。

#### CHAPTER・1 「個性化」の現実

文部省が定めた、いわゆる「普通の教育」で育った人間が、人生の中で迷う瞬間とはなんでしょう。

主に「大学選び」と「社会に出る瞬間」が多いようです。両者に共通しているのは「自己の判断で選択しなければならない」という事です。

先生の言う事を聴き、言われたとおりにする。自分を「個」ではなく、「郡」として育てられ、「受動」が主体の「普通の教育」。それを終えていきなり「さあ！今まで教わったことを生かして自分らしく生きるんだぞ！」と社会に投げ出される瞬間です。

急に「個性」を求められても子供達が可哀想ではないか。それどころか最近「個性化」が叫ばれ、高校の入試にも「個性的な面接」が導入されるとか。

うまくいくと思いますか。

本当はおおいに結構な事なのですが、それまでの教育が「個性化」に全く適していない為、子供達は益々困ります。「個性」とはつまり「自分で判断する基準」です。しかし、「自分」の事は先生が成績を通して判断してくれていたのだから、「周りはいかに自分はいかに。」と考える機会は殆ど与えられません。

私は彫刻が得意でしたが、絵が下手なため美術は1でした。自分はそれでも美術は得意だと信じていたので、嫌いにはならず、今は芸術関係に進んでいます。

「普通の教育」の中で素直に育ったある友達は「自分は美術には向いてないらしい。」と先生に言われたとおりの点数を自分に付けるのです。

私が入った神奈川総合高校は「個性化」と「自由教育」を目標に設立された高校です。例えば時間割は自分で創り、休日も思いのまま。例えば私服で、制服を着たい人は自分で造って登校していました。例えば校則は「マナーを守る」と一つだけで、行事も生徒が創るのです。「自己の判断」と「能動的姿勢」のみで生徒は生活していくのです。「自由」な環境だからこそ「自分で自分を律し、自分の判断でルールを守る」事が求められるのです。

そこはちょっとした「社会」の縮図でした。

ゴミを捨てても怒られない。代わりに自分の校舎が汚れてしまう。休日を増やして楽をすれば周りとの差がすぐにつく。挨拶が出来なければどんな団体にも入れない。夢や目的を創らなければ道に迷う。努力すればするほど自己実現が可能になる。

中学時代はオール5の生徒がざらにいました。彼らはそれなりに自信を持っていたのでしょう。しかし、周りを見れば特に珍しくない。それどころか確実に目標を描き突き進んでいく「個性的」な周りの友達。そして自分を見失い、落ち込んでいくのです。

一生懸命オール5をとっても、「普通の教育」が与えてくれる自信などそんなものです。自分の基準でものを判断できない人間なんて「社会」では生きていけません。「勝ち組」「負け犬」などの世間の基準に振り回されるだけ。

「普通の教育」の中で教えられる「個性」と「自由」は実にハンパです。大人の言う事に反発すれば「自由」であり、制服を变形させれば「個性」だと勘違いする若者達がいても当たり前。そんな表面的な方向にしか発想が行かないように教育されてるわけですから。自分の本当の「個性」を知る機会を与えられず、そのくせ「個性」を求め始める社会。

「目立つためだった。」と言って罪を犯す若者がTVに出てくると、怒りを覚えると共に、同情も少なからずしてしまうのです。

そんな風にしてしまったのは誰なのか。

急激に「個性化教育」が叫ばれ、本来ならば従来の教育方法を見直すべきなのですが、おそらく「個性化」に対応した教育が形になるには、相当な時間が必要でしょう。そしてその間にも、勘違いした「個性」と「自由」が横行し、犯罪の口実になるケースがさらに多発していくかもしれません。おおよそ社会に出られる教育とはほど遠いものになりそうです。社会に出られる訓練をするのが教育の目的ではないでしょうか。

## CHAPTER・2 だからトモエの幼児教育

自分は「個」である。自分で判断する権利と責任を与えられており、それゆえ「自律」せねばならない。

社会は「郡」である。「郡」の中の「個」であり、自律する「個」の集まりである。

自由は「決まり」である。自律する「個」であれ、という「決まり」である。

子供がこれを分からなければ社会は崩壊します。これは「理屈」で教えられるものではない。これは幼児期のうちに「本能」で感じなければならぬのです。これがトモエの環境であり、教育だと思っています。

これには順番があり、必ず「個」の認識が先です。自分の「個性」を知ることは周りの「個性」の存在を信じることであり、だからこそ認め合いながら喧嘩できるのです。だから、早く幼児のうちにそれらを教えなければなりません。

ところでこんな問いは関係者なら少なからず思うのではないのでしょうか。“トモエの教育は「現代の普通の教育」には合っていないのではないのか？”と。

卒園生として答えましょう。“YES”です。

しかし社会人の育成としてはどうだろうかと言えば、それもまた“YES”であると言えます。

むしろ現在行われている文部省の教育のほうが社会に対応していないのです。残念ながら。

「興味を持って自ら行動し（個性の認識）、納得いくまで仲間と喧嘩する（社会の認識）」幼児期を逃すとこれらが苦手な子供が育ってしまいます。

普通の教育を受けたのにこれらを理解している、という人も多くいます。なぜでしょうか。

家庭環境、友人、先人。おそらくこれら。つまり学校の教育以外の世の中から教わったのです。

では今の世の中が今の子供達に教えてくれるだろうか。犯罪のニュースが飛び交う中で「自分はしない」と自分の意思で言える子供をどう育てるのだろうか。

これは今後の教育の大きなテーマです。

### CHAPTER・3 本当の「個性化」が必要な時代

人は元々自分と同じ人間を殺したくない、という習性があるらしいです。

あるアメリカの記録によれば、第一次世界大戦時、兵士が敵兵に対して発砲する確立は30%にも満たなかったそうです。それでは戦争にならないと、軍はある訓練を始めました。するとその後の戦争からは発砲率がぐんぐん上がり、現在のような「敵がいればためらわず撃つ兵士」が誕生したのです。

どんな訓練をしたのでしょうか。

それは実に簡単な事でした。それまで円形だった射撃の的を人型に変え、射撃手の方にどんどん近寄らせるのです。要するに人を撃つ事に「慣れさせる」訓練だったわけです。

「なぁんだ。」と当たり前すぎて肩透かしをくらった方もいるかもしれませんね。そう、我々の時代では「なぁんだ」と言えるくらい、そんな事珍しくもなにもないんです。

「人を殺す」シーンは過激化の一途をたどり、映画やゲームでは当たり前。推理小説では犯罪者の心理が細かく描かれ、子供用の人気アニメでさえリアルな殺人が毎週繰り返されています。日々繰り返される犯罪のニュースも、大抵の人は余程の事でない限り数日後には忘れていくでしょう。

つまり我々は日常から「犯罪者になる為の訓練を受けている。」と言えるわけです。

「しかし私はしない。」そう答える人が多くいる事は事実ですし、そう心から願いたいものです。

私もゲームの中では何度も敵に向かって発砲し、人の家いきなり踏み込んでタンスの中から薬草を強奪していますが、実際にやるかといえば、そこには非常に大きな「距離」があります。

子供の頃ジャッキー映画を観て妹にかかと落としをしていても、今はしない。

そこにはいわゆる「常識」があり、「痛み」を知っており、「社会」の中で生きている事を自覚しているからですね。

見方によってはメディアとはつまり「教育」であり、それは「環境」です。現代は決して善良な環境ではないでしょう。その環境によって犯罪者になる為の訓練をされ、実行に移してしまう人が年々増えています。「常識的な人間」でさえ、インターネットで犯罪関連のサイトに行けば、そこにはそ

れを「普通」とする人達があり、自分の「常識」もまた犯されていきます。

そんな中で我々は生きて行き、「しかし私はしない」と答え続けていく。

とてつもなく「自分の判断」と「社会のルールの認識」が問われる時代が来ているのです。

善も悪も横行する情報過多の時代だからこそ、なるべく早いうちから、自分で判断する「個性」と、社会の中の「自由」を知る事を教えることが必要なのではないのでしょうか。

#### <参考資料>

\* 『素顔同盟』(すやまたけし) 中学3年・国語の教科書(教育出版)より

その朝も目を覚ますと仮面をつけ、鏡に向かった。にせものの笑顔がそこにある。人工的すぎる、口もとだけでしか笑っていない。その他の部分は、目もほおも無表情ですらある。そしてなによりも、その無個性な笑顔はみんなと同じなのだ。人と同じであることは幸福なのだといみんなは言うが、ぼくはそれに息苦しさを感している。

鏡の中のぼくの顔は笑っている。みんなと同じ、昨日のぼくと同じ、そして明日と同じ笑顔なのだろう。しかし、仮面の下はぼくは泣いている。ぼくはぼくでありたい。ぼくはいろんな表情をもちたいと、叫んでいる。鏡の中の仮面はそれを隠している。

学校へ向かうぼくはみんなと同じ笑顔をしている。黙々と人波が過ぎていく。彼らは仮面の下で、どんな顔をしているのだろう。ぼくのように、疑問や怒りを感じることはないのだろうか。

授業中もそのことばかり考えていた。先生は社会を教えていた。

「……つまり、市民が仮面をつけだしたことによって、人と人との摩擦はすっかりなくなり、平穏な毎を送れるようになった……。」

先生は教壇の上で仮面に笑顔浮かべ、熱弁をふるっている。確かに、怒った顔で授業をするより、このほうがいいのかも。だが、いつも同じ笑顔の先生にもの足りなさを感じるのも事実だ。

「……この便利さを、一度手にしてからは、元に戻るわけにはいかなかった。やがて、この仮面は法令化され、制度として確立されるようになった……。」

ぼくは隣の友人の顔を見た。必死にノートをとっている彼の顔も笑顔だった。それと同じ笑顔が四十個(ぼくの笑顔も含めて)先生に向けられているのを、先生が同じ笑顔で受け止めている。どうもこっけいに思えるのだが、隣の友人は奇妙に思うことはないらしく、静かにノートに鉛筆を走らせている。

「……きみたちも現在、義務として仮面を着用しているわけだが、不便を感じたことがあっただろうか。考えてもみなさい。もし、きみたちが仮面をはずし、喜怒哀楽をそのまま表したりしたら……。この世は大混乱に陥るだろう。人は憎しみ合い、ののしり合い、争いが絶えなくなるだろう。いつもニコニコ、平和な世界、笑顔絶やさず、明るい社会。仮面はわたしたちに真の平和と自由を与えてくれたのだ……。」

ぼくは友人にきいてみた。

「先生の今の話、おかしいと思わない？」

「なぜ？ 笑顔のおかげで、ぼくたちはけんかをしないですんでいるんだろ。」

彼は笑顔で答えた。その仮面は実にはこやかに見えた。しかし、本当に仮面の下でもそう思ってい

るのだろうか。ぼくだけが変な考えにとりつかれているのだろうか。

「……仮面をはずすという反社会的な行為が、人々に不安と恐れを与えるのは当然だ。そのような者を排除して、健全な社会を保とうとするのは……。」

「しかし、みんなの仮面の下に隠しているのが本当のぼくたちの姿じゃないのかな。」

「おい、そこ。さっきから、うるさいぞ。静かに！」と先生は笑顔でぼくに言った。

ぼくはしょんぼりしながら、その日、一人で帰った。しかし、素顔とは関係なく、その時の仮面はいつもの笑顔のままだった。だから、だれもぼくの心の内を読むことはできなかつたろう。この仮面はある意味で便利かもしれないが、ぼくにはひどく味気ないものに感じられた。寂しい時は寂しい顔を、悲しい時は悲しい顔をしたかった。

やがて、ぼくは街の東側を流れる川の公園のところまでやってきた。川の向こう側は自然保護区の森になっていた。秋になり、森は赤や黄の色彩にあふれていた。こちら側は川岸がコンクリートで固められ、公園になっている。川沿いのイチョウの木は等間隔に並んでいて、黄金色の落ち葉が歩道をうずめていた。

ぼくはぼんやりと対岸の森林地帯を眺めた。そして振り返ると、高層ビルのぼくの街があった。この橋のない川を隔てて、あまりにも自然と人工物が対立しているのに、改めて驚いた。自然保護区は荒らされてはならない聖域だった。

イチョウの木の陰に女の子がいた。ぼくと同じぐらいの年齢だろう。街から隠れるようにして、向こう岸を見ていた。ぼくは気づかれぬように何本か離れたイチョウの木のそばで彼女を見守った。彼女の顔はみんなと同じ笑顔だった。ところが、彼女は次に、両手で仮面を覆うと、そっとそれをはずしたのだ。ぼくは思わず息を止めた。事の重大さに胸をどきどきさせながら周りを見回してみたが、だれもいなかった。

彼女は素顔になると、遠くの森をもう一度見つめ直した。彼女の素顔は寂しそうで、悲しみさえたたえていた。そして、美しかった。

ぼくは彼女のその行為が違法であることがわかっていながら、不思議ととがめる気持ちにもならなかったし、警察に通報しようとも思わなかった。彼女はぼくと同じ側にいる人間にちがいがなかった。初めて同類に会えたのだ。

その夜、ぼくはなかなか眠れなかった。なぜ、あの時、声をかけなかったのかと悔やんだ。ぼくは、仮面をはずした彼女と一緒にいるところを、だれかに見られるのを恐れたのだ。ぼくは自分の身が大事だったのだ。結局、勇気がなかったのだ。せっかく自分と同じ側にいる人間と出会えたのに、その機会を自分で逃がしてしまったのだ。

夢の中に彼女が現れた。笑顔の仮面をはずすと、悲しい素顔が現れた。彼女はぼくを、遠くの方を見つめるようなまなざしで見た。ぼくに失望し、軽蔑しているようにも見えた。

次の日、ぼくは再び公園に行ってみた。しかし、その場所に彼女はいなかった。

ぼくはどうしてもあきらめきれなかった。学校はいつものとおりだったし、仮面に疑問をもつ者はいなかった。みんな、統一された変化のない笑いを浮かべていた。

その後も東の公園に行くのがぼくの習慣になっていた。しかし、彼女に会うことはできなかった。

もしかしたら、彼女は仮面をはずしているのを見つけられ、どこかに隔離されているのかもしれないかった。

数週間が流れ、ぼくはいつものように公園の川岸にたたずみ、対岸の森を眺めていた。

秋は確実に深くなっていた。そのころ、学校でうわさされていることがあった。素顔同盟という一団があり、彼らは仮面をはずし、社会や警察から逃れて、この川の上流の対岸の森の中で素顔で暮らしているということだった。

川の水は冷たそうにゆっくりと流れていた。真っ赤に色づいたモミジの一群れが過ぎていった。その流れを見ていたぼくはふと妙なものを見つけた。

仮面だった。笑顔の仮面が川に浮いているのだった。その顔は彼女の顔に似ていた。ぼくは木の枝を折り、その仮面を拾い上げた。それはまちがいがなく彼女のだった。彼女はその川の上流で、仮面を捨てたのだ。

ぼくはこの機会を逃がしたら二度と彼女と会えないだろうと思った。ぼくはためらいもなく、その川を上流に向かって歩きだした。

この「素顔同盟」は、高校1年の卒園生が「園長はこの文章を読んでどう思うか？」と持ってきてくれたものである。私は彼と長時間「素顔と仮面」について、私の体験を交えて話し合った。至福の時をすごした。

その後、スタッフや父母と共に、この文章を題材にして学び合った。トモエの大人たちは、子どもたちの純粋な心と日々ふれ合い、素直に生きることを体験的に学んでいる。自分たちの歩みを再確認しつつ、自分の良心により誠実に生きることを学び続けているのが、トモエの仲間たちである。

#### <参考文献>

- \* 『少年犯罪論』 芹沢俊介（青弓社）
- \* 『解体される子どもたち』 芹沢俊介（青弓社）
- \* 『学校過労死』 三池輝久・友田明美（診断と治療社）
- \* 『教育に強制はいらない』 大沼安史（一光社）
- \* 『続・教育には強制はいらない』 P.モンゴメリー・大沼安史（一光社）